138mm　141mm　141mm

中山回遊・百樹万華鏡（秋〜冬）

一、金木犀　きんもくせい

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます

9月の終わりから10月にかけて、鼻にふわりと金木犀の香りが届いておやと見回すようなことがよくあります。姿はないのにどこからともなく秋の訪れを知らせてくれます。花そのものは5mmほどのかわいらしいものですが、葉のつけねから無数に開き、あたりを芳しい香りで包むのです。

金木犀は奇岩で名高い、中国・桂林に原産します。中国では「桂」の字が金木犀の類を指し、桂林は金木犀の林という意味で、その名の通り45万本といわれる金木犀が花開くと街はその香りと金色のじゅうたんに覆われます。桂林は名実ともに金木犀の里なのです。

日本には雄株だけが江戸時代の初めに渡来し、挿し木によって増やされてきました。以来、日本の庭造りには欠かせない存在となり、法華経寺や本行院をはじめとして中山界隈にも多く植えられています。ただ、毎年わたしたちを楽しませてくれる香りも遠く中国の恋人に届くことはないのだとすると、少し哀しいようでもあります。

二、石榴　ざくろ

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

石榴は安産と子どもの護り神・鬼子母神ゆかりの樹木です。中山の鬼子母神堂には日蓮宗の開祖・日蓮が自ら彫った鬼子母神像が祀られ、鬼子母神堂の門幕や龍渕橋には石榴の紋が入っております。

鬼子母神はもともとインドの鬼神で、人の子をさらっては食べていました。あるとき見かねた釈迦が500人いたといわれる彼女の子どものうち、末っ子を隠しました。半狂乱になって我が子を探す鬼子母神に釈迦は子どもを失う母親の苦しみを説き、以後鬼子母神は仏法とともに安産と子どもの護り神となりました。鬼子母神の像がしばしば石榴を持っているのは一つの果実にたくさんの種がつまっている石榴の実が多産・豊穣の象徴だからといわれています。

石榴の木は上背こそそれほどありませんが、ねじれた幹の佇まい、鮮やかな緑に紅一点の語源となった朱色の花、同じく朱色の果実と四季折々楽しむことができます。法華経寺をはじめ多くの寺に植えられ、日蓮と鬼子母神の縁を今に伝えています。

三、銀杏　いちょう

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

銀杏の黄葉の、鮮やかな黄色は遠くからでも眼を引きます。宮沢賢治は童話『銀杏の実』のなかで、「黄金色」の髪の銀杏の木を母親、銀杏の実を子どもたちに見立て、その美しさを太陽の光と重ねています。

中山には「泣き銀杏」の悲話があります。弘安7年（1284）、日蓮の三回忌の際、法華経寺開祖日常の息子・日頂は法要に遅れてしまいました。これが日常の逆鱗に触れ勘当されてしまいます。そして法華経寺境内の銀杏の下で7日間泣きながらお経をあげ詫び続けました。けれども師匠でもある日常は、十数年経って死の床に臥しても日頂を許すことはありませんでした。やがて日常が亡くなると日頂は同じ銀杏の木の下で激しく泣いたそうです。こののちこの銀杏を「泣き銀杏」と呼ぶようになりました。

この話は、日蓮宗の厳しい戒律と親子の情の葛藤を物語っています。奇しくも、銀杏の古木にできる気根を「乳」と呼び、母親になぞらえることがあります。銀杏には親と子の絆をゆさぶるなにかがあるのかもしれません。

四、無患子　むくろじ

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

無患子の黄葉は初冬の柔らかい光を透かして光ります。果実は飴色で、飴細工のような薄いカプセルで中には黒い種が入っていて、ふるとからからと音がすることでしょう。飴色の皮にはサポニンという物質が含まれ、これは石鹸と同じで油を分解する働きがあります。昔は無患子の実で洗濯をしたり髪を洗ったりしたといいます。そして、中の黒い種に穴を開けて羽根をつけるとお正月の羽根突きに使うつくばねになります。

羽根突きという遊びはもともと邪気を払う陰陽道の秘伝であったものが、いつの間にか一般にも知られるようになったものといわれています。乾いた音を立ててつくばねを打ち合って新たな年の無事を祈ったのです。

中山では法華経寺妙見堂のそばにおそらくただ一本無患子の木があります。結びにあえてこの木を取り上げたのは、ただ一本の樹木すら人の暮らしとは切り離すことができないことをご覧に入れたいからです。このマップを手に法華経寺を東山魁夷記念館を目指し歩かれるときに、少しでも風景のなかに隠された物語に触れていただけたら幸いです。

Illustration/ Abu,Xun

文化の街かど回遊マップ

中山地区編

中山は日蓮宗の大本山法華経寺が所在することで知られ、法華経寺は山号を「正中山」と号し、一般には「中山法華経寺」と呼ばれています。

法華経寺周辺のこの地区は、文化財や歴史資産そして日蓮ゆかりの伝説が数多く遺され、緑豊かな趣のある街です。

中山の文化財

法華経寺　祖師堂

◇国宝
1 立正安国論　2 観心本尊抄

◇国指定重要文化財
3 五重塔　4 法華堂　5 祖師堂　6 四足門
7 絹本著色十六羅漢像
8 日蓮自筆遺文　9 絹本著色日蓮聖人像

◇県指定有形文化財
10 木造釈迦如来・多宝如来座像　11 絹本著色十羅刹女像

◇市指定有形文化財
12 総門（黒門）　13 本阿弥家分骨墓
14 光悦筆扁額　15 本阿弥光悦分骨墓
16 元弘の板碑

※ 1 2 8 →原則非公開。毎年11月3日の「聖教殿お風入の儀」のときのみ公開。
お問い合わせ（法華経寺）TEL 047-334-3433

※ 7 10 →非公開。お問い合わせ（法華経寺）TEL 047-334-3433

※ 9 11 →非公開。お問い合わせ（浄光院）TEL 047-334-5336

法華経寺の行事

法華経寺　五重塔

一月	新年祈祷会　子育大祭
二月	節分会（星まつり）　大荒行成満会
三月	彼岸施餓鬼会（春分の日）
四月	花まつり　千部会
五月	子育大祭　太田稲荷大祭
六月	宇賀徳正神大祭　清正公大祭
七月	御盆施餓鬼会
八月	
九月	子育大祭　秋彼岸
	彼岸施餓鬼会（秋分の日）
十月	八大龍王大祭
十一月	大荒行入行会　聖教殿御開扉（文化の日）
	妙見尊星大祭（酉の市）
	御会式
十二月	納めの子育祭　おたきあげ　除夜祈祷会

その他恒例行事
鬼子母神様御縁日　毎月８日・18日・28日
月例法話　毎月18日　12時半より
甲子大祭　甲子の日（大黒様）利堂　午後１時より

お問い合わせ先 ● 市川市　文化振興課
☎ ● 047-300-8020
URL ● http://www.city.ichikawa.lg.jp/cul01/index.html　（文化振興課のページ）

2015年3月発行

中山回遊・百樹万華鏡（春〜夏）

中山は東京から電車で30分ほどの距離にありながら、古木が法華経寺境内を核に広々とした樹林地をつくり、木立の合間から望む建造物ともあいまって美しい景観をなしています。

これら豊かな緑は季節の移ろいとともにさまざまな表情を見せ、ときに時間空間を飛び越えた旅に訪れるものを誘ってくれるでしょう。

中山を歩きつつ迷い込む万華鏡。新たなる回遊の愉しみをどうぞご覧ください。

一、染井吉野　そめいよしの

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

日本の春を彩る桜。各地に桜の名所があり、入学、就職など新しい門出に合わせるかのように咲く桜は日本人にとってもっともなじみが深い木のひとつ。とりわけ染井吉野は桜の代名詞といっても過言ではありません。中山では法華経寺の参道沿いにたくさんの染井吉野が並び、特に五重塔が満開の染井吉野に包まれる様子は圧巻です。

平安時代から単に「花」と言えば桜を指すようになりましたが、かつては桜といえばヤマザクラなど野生のものが中心でした。染井吉野は江戸時代中期〜後期に、現在の文京区にある染井村で品種改良の結果生み出されたといわれています。

後年の研究でエドヒガンとオオシマザクラの雑種であるという説が有力になっています。エドヒガンから受け継いだ花が満開に咲き、はらはらと散るという特徴が春の高揚感に興を添え、日本人の心を惹きつけたのでしょう。

二、欅　けやき

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

初夏、みずみずしい新緑に燃え立つ欅は確かな存在感を放っています。まっすぐに伸びた幹に扇のように広がる枝ぶりは新緑、紅葉（黄葉）、冬の枯れ姿とどれをとっても美しく、街路樹や広場ではおなじみです。

法華経寺境内には大きな欅の木がいくつもあります。大過なく育てば寿命は長生きですので、高さは20mに届こうかというほど。落雷があって途中で折れていたり、うろができていたりしますがたくましく生きています。

風が吹けばざわざわと枝をゆすって音を立て小枝ごと葉を落とすこともあります。新緑の頃は赤い小枝に小さな花がついていることに気づくことでしょう。夏には夏で同じ木のうちでも上のほうにつくか下のほうにつくかで葉の大きさが違っているようすがわかります。そして秋には種をつけた小枝が紅葉（黄葉）した葉とともに舞い落ちて新しい命をはぐくみます。

三、百日紅　さるすべり

回遊マップのマークのところでこの植物が見られます。

中山界隈のお寺には必ずと言っていいほど植えられている百日紅の名前には大きく二つの意味があります。「さるすべり」は「猿も木から落ちる」というようなことで幹が成長するにつれコルク層がはがれ落ちて、表面がつるつるしているところに由来します。この、つるつるとして、ところどころまだらにはがれ残っている様子が面白く、庭によく植えられるわけです。

もう一つの意味は漢字の「百日紅」に込められています。百日紅は盛夏にみっしりと紅色の花を咲かせます。花がほろほろと散っては咲き、散っては咲きを繰り返し、百日に渡って咲くからこう呼ばれます。

かつて杉浦日向子は代表作『百日紅』で葛飾北斎の汲めどもつきぬオ能を百日紅になぞらえました。はかない染井吉野に絢爛たる百日紅と、木にとっては子孫を残すことが人間にとってはまた異なった意味を持つようです。

Illustration/ Abu,Xun